

封印された感動を明るみに出す人

多田聡詩集『岡山発津山行き最終バス』に寄せて

1

多田聡さんは、この世の人間関係が織りなす多様な瞬間に宿る感動を書き留めてきた詩人だ。その多田さんの真つ直ぐな眼差しは、感動を共有した他者や自然への感謝に満ちている。また人間存在の様々な問題点を抱え込みながらも、愛や自由に満ちた詩篇なのだ。多田さんの若い頃の手作り第一詩集は、一冊も現存していないので読むことは出来なかった。岡山大学の法文学部哲学科を卒業し、岡山の山陽放送に入社し定年までプロデューサーなどの放送の仕事で多忙な日々をおくっていたという。その間も詩作を続けていたが詩集はなぜか出さなかった。ようやく二〇〇三年に発行した第二詩集『愛の此岸で』は、妻や子への愛をテーマにした詩篇だが、岡山空襲や戦争の悲劇を語り継ごうとする詩集でもある。その中で「夏至の光」を引用してみる。

夏至の光

小さな庭の午前七時

そうして目隠しされた鞍馬のように
通り過ぎて行くのだ美しいものそばを

多田さんの眼差しは、夏の朝の一瞬の雫を捉える。その七色の輝きの感動を妻に伝えてそれを共有しようとする。このような感動を伝え合う行為こそが、言葉を発する原点なのではないかと静かに語りかけてくれる。我を忘れて見入ってしまう「心の傾斜」を書き留めるだけでなく、人は無心に輝くものを一緒に見つめ合い、共有しようとする存在なのだという。またその感動を「封印された感動」として想起しようとする。つまり多田さんの詩の方法は、いかに生きた感動を伝えることが出来るかを問うて実践している。この「夏至の光」は、私たちが日頃忘れ去っている自然現象の中に潜む光の美しさを、身近な家族と讃える喜びを気付かせてくれる。また「印象派の画家たちのように」は子供と夕暮れの光を見つめている詩だ。それも引用したい。

印象派の画家たちのように

夏のおわりの
午後七時

津島運動公園のポプラ並木を億万の光の粒子がわたって
く

物干竿が光る

夜の漏斗があつめた夏の雫
一列に並んで七色に光っている

ぼくはあなたを呼ぶ
二人で眩しいものを見つめる

なんと心この傾斜だろう
情熱のフィルターも分析のプリズムも必要としない

もつとも身近な女とこれほどまでに無心に
見つめあったことがあっただろうかあのよう
に輝くものを

小さな庭の雫のジグザット
射しこむ夏至の光

やがて慌しい一日の始まりは
執行官のように二人を追いたて

ぼくらは出かける
封印された感動を家に残して

おそらく印象派の画家たちが画布のうえに捉えようとした
ものを
わたしもあかずに眺めている

それらの際限ない光の階梯とおなじように
息子よ わたしはおまえの愛を愛している
あかるい山脈のようなおまえの喜びを
睡蓮のように閉じるお前の眠りを
刻々とかわるおまえの成長のめくるめく放射の一瞬を
なぜなら
それらは自由なおまえの心だから

夏のおわりの
午後七時
梢をわたる夕ぐれのざわめきを聞きながら
いつしかわたしは詩いはじめ
新しい夜明けを見つめる画家たちのように
不確かな言葉の輪郭を失いながら

多田さんは岡山県の津山市で生まれ育ったが、学生時代に岡山市に転居し結婚後も市内の津島に暮らし子育てをしていた。晩夏の津島公園の夕暮れの光の美しさを多田さんは、「あかずに眺めている」。夕暮れの光の無数の諧調と息子の成長

する変容を比較しながら、それら両方の存在を慈しんでいる。そして息子の変容が自由な心へと繋がり羽ばたいていくことを願っているのだ。そのように感じている自分の存在が例えていうなら「印象派の画家たちのように」思えてきたのだろう。人生の瞬間は印象派の画布のようではないかと直観している。

その他に夫婦喧嘩を記した「犬も食わない話」や性愛を記した「ためいき」「質問」などの詩篇で赤裸々に語る多田さんは、家族を通して人間存在の在り方の不可思議さを明るみに出そうとする。

2

新詩集『岡山発津山行き最終バス』は、Ⅲ章三十五篇から成り立っている。Ⅰ章「岡山発津山行き最終バス」十三篇は主に岡山の様々な場所で開催した人びとのが記されている。冒頭に置かれたタイトル詩の「岡山発津山行き最終バス」は、物語性があり異色の詩篇だ。最終バスに同乗したみすばらしい老婆が、自分が降りるべきバス停を過ぎてしまい運転手に途中下車させてもらう。しかし料金が二〇〇円足りないと言われ運転手とトラブルになる。多田さんはお婆さんに同情し、自分が二〇〇円を払ってもというが、運転手は受け取らない。お婆さんは仕方なく二〇〇円を払い罵声を運転手に吐き去っていった。詩は老婆が去った後も続くので後半部分を引用してみる。

すると

終始無言だった他の乗客が口々に言いはじめたのだ
「運転手さん今夜は車庫入れがおくれて気の毒だね」
「料金をこまかすなんてけしからん」

そうか他の乗客は

運転手に味方していたのか

トラブルを強圧的に処理することを望んでいたのか
それにしても真相は分からないままだった

料金を箱をひっくりかえし

整理券とつきあわせて確かめるまで

にわかには舌になつた人たちはうらはらに

ぼくはひとり沈黙の底に沈んでいく

心の闇に光る憎しみの目にたじろぎ

みずからの独善を恥じながら

窓外に百円玉のような

視線誘導標のながれる国道53号線

バスは夜の入口をひたはしり

予定より少し遅れただけで津山に着いた

心の断層を軋ませてブレーキがかかり

何事もなかったかのように停車した

(「岡山発津山行き最終バス」後半部より)

多田さんは、身なりや風采で人を差別するような運転手や乗客の先入観に疑問を抱いている。運転手はもう少し老婆の言い分を聞いてトラブルを処理できなかったか。乗客も後から老婆を非難するなんて恥ずかしいではないかと思っている。自分を含め運転手や乗客たちは人生の先輩の老婆にもう少し敬意を持って接することが出来たのではないか。多田さんの行為は「独善」だったかも知れないが、一方的に料金を払わなかったという抗議と払ったと主張する老婆の双方を仲裁するための苦肉の提案だった。双方の幸せを願つての多田さんの行為は無視された。しかし多田さんは運転手に迎合する乗客たちの態度に複雑な気持ちを抱く。そんな老婆をめぐる人間模様を通して「心の断層」を提示し、その迎合していく民衆の弱さやしたたかさを考えようとしていたのだろう。

それから多田さんがどうしてこのような詩を書いたのか少し考えてみた。これは私の勝手な推測だが、多田さんは最終バスに乗って故郷津山の母にきつと会いに行つたのだろう。多田さんは母の晩年七年間には津山に戻り介護をされて見取つたと聞いている。たぶん母が元気な頃にも母に会うためにバスに乗っていた。そして母と同年輩の老婆が運転手に非難

されていることに、いたたまれない思いを抱いたのだろう。親しいの多田さんは老婆と母をどこかだぶらせていたのかも知れない。

次の二番目の「無言」という詩も民衆の無名性の残酷な一面を抉り出している。

無言

終電まぎわの電車に

疲れた無言が

並んでいた

酔っ払いが乗ってきて

からみだした

目を伏せたりそっぽをむいた

善良そうな無言にむかつて

突然

からまれたひとりが

酔っ払いを突き倒した

するともうひとりが立ちあがつて

ころんだ酔っ払いを足げりにした

無言は
次々におそいかかって
腰をけり
背中をこづき
指をふみ

すばやく元の席にもどっていった
みごとに共同した村社会のやり方で

目くばせもなく
号令もかけず
男も女も黙々とそれをやった

酔っ払いは
床にころがって
ポカンとしている

ふかい闇を乗せて
電車は急カーブにさしかかる
狂気の一瞬をふりきるかのよう
ぐらりと傾いだ

この詩を一読した時に村の掟破りのタブーを描いた高知の

その時 ふと仰いだ空は……

その日のことは
今でもはつきりと憶えている
玉音放送が伝えた
日本は戦争に負けたりしい
と言ううわさ

これでもう死な無くても良いのだ
もくもくと湧いてくる不安の中
ほっとするものを感じた
思えばその時ぼく等は

国を挙げて洗脳されていたのだ
鬼畜米英が来たらば全員玉砕するまで闘うことを

その日ぼく等は国民学校の五年生だった
この街が戦火に焼かれた日も
ひもじさで倒れそうになった日も
ぼく等は最後には神風が吹くことを信じて
日々を送っていたのだ

戦争にまけたことは悲しくつらいことだったが
死神の手を離れたことは嬉しいことだった

詩人小松弘愛さんの名詩「狂泉」や、小野十三郎の民衆批判を想起してしまった。無抵抗の酔っぱらいを次々と足蹴にした乗客たちに対して、多田さんは無関心を装った民衆が残酷になる「狂気の一瞬」を見てしまう。個人としての愛や人間の尊厳を抱いているにもかかわらず、匿名としての民衆の迎合性の中に恐るべき残虐性が秘められていることを垣間見せている。多田さんは愛の詩人だからこそ人間が些細なことで憎しみを抱く存在であることを敏感に察してしまおうのだろう。また人間の根源的な自由を信ずるからこそ、民衆が共同体の中で迎合的に他者の自由を抑圧していく恐ろしさに気付くのだろう。そんな意味で多田さんは人間の「心の断層」の重層性をそのままリアリズムで受け取り、それを提示しながら読者に考えさせる詩法なのだ。私はたくさんの詩人が活躍している岡山でも、このように自己や家族や民衆の弱さを抉り出して赤裸々に詩を書き続けている詩人は、数多くはいないと感じた。

3

二章の十二篇は、戦争とは何かという問いや、今も続く戦争の悲劇を問い続けている詩篇だ。冒頭の詩「その時 ふと仰いだ空は……」には、終戦時の少年であった多田さんのありのままの心境が書き記されている。

まるで世界が

風景が

足元から崩れそうな感覚のなかで

その時

ふと仰いだ

空は

青かった

終戦時に十歳の少年だった多田さんは、この詩にあるように「神風」を信じ、「鬼畜米兵」と玉砕するまで闘うことを教え込まされていた。多田さんは一九四五年八月十五日の瞬間を少年の目で記した。その洗脳された自分を曝け出しながら、戦前の大人たちが導いていた侵略戦争の最終結末によって「足元から崩れそうな感覚」が押し寄せてきたことを明らかにしている。また正直に戦争が終わり死神も消えて行ったことも記している。そして絶望の果てにも空の青さが垣間見えて、生の時間が継続するかすかな希望のようなものも暗示している。多田さんの終戦時の崩壊感覚から臨まれた青空こそ、戦後に生き直そうとした多くの民衆の心情の代弁であるように私には感じられた。多田さんは決して飾ることなく無欲で純粹に、自分の置かれていた場所と時間から、詩を組み立てて後世に残そうとしている詩人なのだ。

二章の中に「あの子の暗い……」という詩がある。この詩

には、今でも戦禍にある国々の子どもたちの「絶望と悲しみ」が、自分の終戦時と体験と重ねながら語られている。

あの子の暗い……

あの子の暗い
目の奥を見てくれ
絶望と悲しみの底から
訴えてくるものを
それを受けとつたならば
何をすればいいか考えてくれ
君にできることでもいいから

あの子の眼差しのままで
僕らは一人ひとり試されている
〈否 試されているのは神〉
あの子の目に出会ったものは
たじろいだりせずに
確かな答えをだしてくれ

アフガンで イラクで
醜悪な手がこじ開けた

さだきみさんに同行してもらい、詩集編集の打合せで岡山の病院に訪れた時に、私は言い知れぬ感動を覚えた。四人部屋の窓辺近くのベッドから起き上がり、長机のようなものを備えて、その上の原稿の束に赤を入れていた。他の三人は寝ていたが、多田さんは誰も近寄ることもできない威厳のようなものを感じさせながら、熱中していたのだ。身体は瘠せ気味だったが、その立ちのぼるエネルギーにただならぬものを私は感じた。ここに間違いなく優れた詩人がいると確信していた。病室は多田さんの書齋と化していたのだ。私の聞いた編集上の細かな質問をにもきちんと答えてくれたが、発声がやや聞き取りにくいところがあり、奥様に聞きなおしてもらった。闘病中にもかかわらず詩集をまとめるという底知れぬ情熱を私は受け取り、何か清々しいものを感じていた。多田さんは私と同じ哲学科出身と言うこともあり、専攻した哲学者の名前を聞くとカントとフッサールなどの名前を挙げられた。私とも共通していたので、多田さんは笑みを浮かべ、眼も輝きを増したように感じた。このような打合せをできて心の奥底が温かくなった思いがした。四章の詩論は、多田さんが哲学科でアリストテレスのレトリック論を読みこなし、現在の記号論を踏まえているからこそ書くことができたのだと考えられる。この二編の詩論も多田さんの詩を読む上でもまた詩的なレトリックの本質を考察する上でも参考になるだろう。多田さんとは細かな会話はできなかったが、多田さんが

パンドラの箱の底に
残っていたのは
希望ではなかったから

さあ 君にできる仕方でもいいから
はじめてくれ
あの子の手が
箱の底に届かぬうちに！

多田さんは戦争の悲劇を語る時に、子供たちの目の奥の「絶望と悲しみ」から語ろうとする。その子供たちの眼差しを直視しないから、愚かな戦争を開始してしまう。その結果開けられたパンドラの箱には、希望ではなく、「絶望と悲しみ」しか残っていない。子供たちにその虚しいものを掬わせないために大人たちは何をしたらいいか、「一人ひとり試されている」と多田さんは静かに語っている。私は良質な反戦詩とは何かと問うたら、きつとこのような詩を思いうかべるだろう。多田さんは根底にはこのような戦争責任を担い続けている硬質な問いが継続されている。

三章の十篇は、友人たちへの追悼詩や定年後の生活を綴ったものや最近の心境を記した詩篇だ。そして遙かに人生の旅を洞察する味わい深い詩篇がある。

多田さんは現在、パーキンソン病で入院中だ。詩友のくに

カントやフッサールを学び影響を受けていたことを知り、なぜ多田さんが感動を根底に据えて詩作を続けているかが少し理解できた。なぜならカントは他者の存在を手段ではなく目的とするような恒久平和を目指した哲学であり、またフッサールの現象学は直観された驚きを記述する哲学でもあるからだ。そのことを多田さんは生涯にわたって詩作において試みているのだと私は理解できた。

最後の詩「道」は、難病と闘う多田さんの現在の瞬間を語るに最も相応しい詩だろう。このような心境になられても「自在に行き交うものに吹かれながら」多田さんは詩作を継続するだろう。そんな詩篇を読み続けたいと願っている。

道

ぼくは画布に伸びる白い道を見つめる

牧場や 静かにくさを食む馬や その果ての灯台や……

総べてを捨て去りついに道だけになった一筋のものを

その道に人影はない

それなのに 何かが ぼくを追い越したまた帰って行くのだ

ぼくも 捨て去ることができるだろうか

不確かな言葉の錘を

午後の高原を渡る風のように
この道を 自在に行き交うものに吹かれながら

*「道」東山魁夷 一九五〇年制作
東京国立近代美術館蔵